

## 安政～慶応年間における三河吉田の米価変動

橘 敏 夫

### はじめに

江戸時代の物価は、米価である米直段と、これを除いた諸物価である諸色直段に大別でき、その動向は特に庶民にとっては生活の質に直結する関心事であったろう。しかし、宝暦5年(1755)以降の米麦・大小豆・灯油等の小売価格と銭相場が『刈谷町庄屋留帳』により判明する三河刈谷の場合を除けば<sup>(1)</sup>、その実態の解明は進んでいないようである。その原因は様々であろうが、やはり刈谷のような良質の史料に恵まれることが少ないからであろう。

三河吉田においては、文政2年(1819)以降の米の町相場が柴田善伸「米価記」により判明するが、その下限は嘉永元年(1848)である<sup>(2)</sup>。したがって幕末期の動向については未解明のままである。

筆者はこれまでの拙稿において、幕末期の吉田における米・雑穀・豆腐・灯油値段や鎌の購入、修理費用について取り上げてきたが<sup>(3)</sup>、物価動向の全体像を示すことはできていない。

そこで小稿では、安政元年(1854)～文久2年(1862)の米の町相場と、安政元年～慶応3年(1867)の小売白米値段につき、判明しているデータを紹介する。後掲のように、銭相場や白米以外の小売値段も紹介することが可能であるが、特に米価にこだわるのは、

江戸時代が石高制社会と呼ばれる側面を有するからにほかならない。

なお、紹介にあたり、天明・天保飢饉時の町相場の動向と比較して、データの羅列に止まらないように配慮したつもりである。

### 1 吉田の町相場

万延元年(1860)8月15日、吉田藩家老西村次右衛門は、自身の公私日記である『西村次右衛門日記』に、天候や出仕時刻、決裁・指示事項等を記した。そこには相場書の抄録もあった<sup>(4)</sup>。

△八月十五日晴、四時平服出仕申候、  
一式日ニ付、諸士被参四時迄宅ニ而逢申候、  
(中略)  
一相場書出ル、米十一俵五分、銭壹分ニ  
壹貫六百四十八文、  
(後略)

翌16日、西村は前日に記録した米銭相場を除く諸相場につき、改めて『西村次右衛門日記』に書き写している<sup>(5)</sup>。

△八月十六日晴  
(中略)  
一昨日出候諸相場書左之通り、但米銭ハ  
昨記ニ有之、  
一金十兩ニ付 糯米 十二俵  
一同 大麦 式十一俵

一同 小麦 十四俵五分  
 一同 大豆 十貳俵  
 一同 小豆 八俵五分  
 一同 稗 五十俵  
 一種油壺升代 六百廿四文  
 一胡麻油壺升代 六百四十八文  
 一他所酒壺升代 貳百文  
 一地諸白 当時無御座候  
 一同片白 右同断  
 一溜壺升代 貳百文  
 一酢壺升代 七十貳文  
 一赤味噌百文ニ付 三百目  
 一塩百文ニ付 口升  
 右之通惣町中当時相場如此御座候、  
 以上、  
 申八月十五日 月番萱町庄屋  
 弥右衛門印

町御役所様  
 このように『西村次右衛門日記』には、相

場のなかでも西村の最大の関心事である米銭相場が式日である朔日と15日を中心に抄録されている。式日以外にも抄録されていることから、町役所には、適時月番庄屋から相場書が提出されていたのであろう。

『西村次右衛門日記』は、安政元年（1854）後半と同3・4年、万延元年（1860）から文久年間（1861～1863、但し2年は9月まで）、元治元年（1864）の約7年半分が残存しているが、藩主松平信古の大坂城代就任にともない、西村が文久2年6月から大坂に在番するようになると、日記への記載方法が変わる。文久3年正月の場合を例に挙げると、「吉田表正月相場十一俵三分」という表現になる<sup>(6)</sup>。これでも米価を示すデータとしては大切ではあるが、相場書の米価とは質が異なると判断し、表1においては文久3年と元治元年を除いた町相場を示すことにした。

町相場の動向を概観すると以下のようなろう。安政3年は金10両につき20俵前後で

表1 安政元年～文久2年の吉田町相場（金10両につき）

年.月.日.	町 相 場	年.月.日.	町 相 場	年.月.日.	町 相 場
安政元.6.19.	17俵1分	15.	23俵2分	12.1.	21俵
閏7.24.	17俵8分	5.1.	23俵2分	15.	21俵
8.11.	18俵8分	9.	22俵7分	安政4.1.1.	20俵
9.15.	18俵8分	15.	22俵7分	15.	19俵6分
10.1.	〃	19.	22俵2分	2.1.	19俵4分
10.15	〃	24.	21俵7分	8.	19俵
11.1.	〃	6.1.	21俵8分	15.	19俵
15.	18俵3分	15.	21俵3分	3.1.	19俵2分
12.1.	〃	28.	20俵8分	15.	〃
15.	18俵	7.1.	〃	4.15.	19俵
安政3.1.1.	21俵5分	15.	20俵4分	28.	18俵6分
15.	21俵6分	22.	19俵9分	5.1.	〃
16.	21俵5分	8.1.	20俵	4.	17俵8分
2.1.	21俵5分	9.	20俵6分	15.	〃
3.1.	21俵5分	15.	21俵2分	21.	17俵4分
15.	21俵7分	25.	22俵2分	閏5.1.	17俵4分
21.	22俵2分	9.1.	22俵2分	10.	17俵
22.	22俵7分	10.1.	22俵4分	15.	16俵6分
4.1.	22俵7分	11.15.	20俵7分	21.	16俵3分

年.月.日.	町 相 場	年.月.日.	町 相 場	年.月.日.	町 相 場
22.	15俵 9 分	22.	11俵 9 分	3.	10俵
6.1.	15俵 9 分	26.	12俵 6 分	11.	12俵 9 分
11.	15俵 5 分	9.1.	〃	15.	〃
7.1.	15俵 3 分	15.	〃	11.1.	〃
11.	16俵 3 分	22.	12俵 1 分	15.	〃
15.	16俵 5 分	10.1.	〃	24.	12俵 5 分
8.1.	16俵 5 分	9.	10俵 4 分 4 厘	12.1.	12俵 3 分
15.	15俵 7 分	15.	〃	15.	11俵 7 分
9.1.	15俵 7 分	11.1.	10俵 4 分 4 厘	23.	11俵 2 分
15.	16俵 2 分	15.	10俵 5 分	文久2.1.1.	11俵 2 分
10.1.	〃	25.	10俵 2 分	5.	10俵
15.	15俵 3 分	12.1.	〃	7.	10俵 7 分
11.1.	15俵 4 分	15.	□俵 2 分	22.	11俵 2 分
15.	15俵 3 分	16.	10俵	2.1.	〃
24.	15俵	文久元.1.1.	10俵	15.	11俵 5 分
12.1.	14俵 8 分	7.	9俵 2 分	3.1.	11俵 8 分
15.	14俵 2 分	15.	9俵 7 分	15.	〃
万延元.1.1.	〃	2.1.	〃	4.1.	11俵 9 分
6.	13俵 3 分	8.	8俵 8 分	15.	12俵 3 分
14.	13俵 4 分	15.	8俵 5 分	5.1.	〃
2.1.	13俵 1 分	25.	7俵 8 分	15.	11俵 9 分
15.	〃	3.1.	〃	21.	11俵 5 分
19.	12俵 9 分	15.	〃	6.1.	〃
29.	12俵 6 分	4.1.	8俵 2 分	15.	〃
3.1.	〃	15.	8俵 2 分	7.1.	12俵 1 分
15.	12俵 4 分	5.1.	〃	8.	12俵 7 分
26.	12俵	15.	〃	10.	13俵 1 分
閏3.1.	〃	6.1.	〃	15.	13俵 5 分
15.	〃	4.	7俵 6 分	19.	14俵
4.1.	〃	15.	〃	8.1.	〃
15.	〃	7.1.	〃	12.	14俵 5 分
5.1.	〃	15.	8俵	15.	〃
7.	11俵 7 分	29.	8俵 5 分	26.	15俵 1 分
15.	11俵 3 分	8.1.	〃	閏8.1.	〃
21.	10俵 9 分	3.	9俵	15.	〃
6.1.	11俵 3 分	8.	9俵 6 分	20.	14俵 6 分
15.	11俵 3 分	14.	11俵	26.	14俵 1 分
7.1.	11俵	15.	〃	9.1.	〃
15.	〃	20.	12俵	4.	13俵 6 分
20.	10俵 8 分	9.1.	11俵 5 分	15.	13俵 1 分
8.1.	〃	15.	11俵		
15.	11俵 5 分	10.1.	〃		

出典 『西村次右衛門日記』上・下・補遺（昭和60年3月・平成6年3月、豊橋市）。史料で「据り」とある場合は「〃」とした。

あったから、この年が豊作であったことが予想できる。しかし安政4年に入ると、徐々に上昇する。『西村次右衛門日記』が欠けている安政5年については、地方役人の『三浦深右衛門日記』に次のような記事があるから<sup>(7)</sup>、基本的には上昇基調であった。

(安政5年7月)

廿四日曇天、沖揚口(雲力)

(中略)

今日二百十日也 戸田口左衛門

一米価追々引上、当時左之通之由ノ咄也、

御蔵相場 拾式俵九分

町相場 拾式俵四分

この勢いは、万延元年に入っても変わらない。その原因のひとつとなる安政4年から続く不作状況については、拙稿「三河吉田藩における大豆耕作の実態と流通・消費」のなかで取り上げたことがある<sup>(8)</sup>。こうした最中、東海道の宿場でもある吉田では、公用通行者に対する飯米不足が心配されるようになった。

『西村次右衛門日記』によると、万延元年5月25日に次のような決定がなされている。それは、「御通行之御方様有之節、飯米払底ニ而差支候由ニ而、本陣・問屋より御米三百俵御払之儀、願出候旨町郡奉行申出ル、尤御勝手方へも右評議致し、願出候半百五十俵町方書上相場十俵九分ニ而御払ニ可仕旨、町郡奉行申聞候」と、いうものであった<sup>(9)</sup>。

その後も町相場は上昇を続け、文久元年6～7月に7俵余とピークを迎える。これは連年の不作と、米の端境期が重なった結果であろう。しかしこうした状況も『西村次右衛門日記』の文久元年8月3日条に「相場書出ル、米九俵ニ下ル、諸国共大豊作之由」が伝わると<sup>(10)</sup>、徐々に下降傾向になりはじめる。結局、同年12月22日の『西村次右衛門日記』によれば、「米価下落ニ付諸式之直段可引下旨」の書付が町郡奉行から届けられ、それを同月25日にそのまま西村が決済することになる<sup>(11)</sup>。この後も町相場の下降は、文久2

表2 天保5年(1834)の町相場

月	町相場(金10両につき)
1月	12俵9分5厘～13俵
2月	13俵5分～12俵7分
3月	12俵7～8分
4月	11俵5～8分
5月	11俵
6月	11俵
7月	13俵～16俵5分
8月	17俵8分
9月	17俵1分
10月	次第に下降
11月	次第に下降
12月	20俵

出典 柴田善伸「米価記」、『三河文献集成』近世編  
(昭和40年7月、愛知県宝飯地方史編纂委員会) 734頁。

年にかけて続いていくことになる。

ここで、文久元年6～7月の金10両につき7俵6分というピーク時の相場の水準を考えるために、「米価記」から天保飢饉の際の町相場を取り上げる。最初は、天保飢饉の第1段階である天保5年の町相場の動向である(表2)。同年は1月に13俵であった町相場が、2月に13俵5分と下降したが、3月に入ると12俵7～8分と上昇をはじめ、4月には11俵後半、5・6月には11俵となった。

5月の動向を詳細にみると、実際の町相場は5月15日に金10両につき10俵にまで高騰したが、吉田藩が同月22日に町相場の上限を11俵と設定したことから、以後はこの水準が厳守されたのである。その後、7月には13俵に低下し、そのまま町相場は下落していく。この要因は、収穫期を迎えたことであろう。

次に、天保飢饉の第2段階である天保7・8年の町相場である(表3)。天保7年1月から6月まで17～16俵で推移していたところ、6月10日に15俵9分となる。町相場は、そのまま上昇を続け、11月前半には金10両につき9俵9分3厘と第1段階を超える水準に達した。

表3 天保7・8年の町相場

月	町相場 (金10両につき)
天保7年	1月 17俵5分～16俵2分
	2月 16俵4～8分
	3月 16俵4～8分
	4月 16俵4～8分
	5月 16俵4～8分
	6月 16俵4分～15俵9分
	7月 14俵4分～13俵5分
	8月 13俵5分
	9月 13俵5分
	10月 13俵5分
	11月 9俵9分3厘
	12月 12俵2分～9俵3分
天保8年	1月 8俵2分～7俵8分
	2月 7俵2分～8俵
	3月 8俵～7俵2分
	4月 6俵8分～8俵
	5月 8俵～7俵8分
	6月 7俵8分～8俵6分
	7月 (不明)
	8月 9俵2分～10俵
	9月 8俵7分5厘～13俵5分
	10月 13俵7分～15俵
	11月 14俵7分
	12月 14俵2～3分

出典 表2と同じ。

表4 吉田藩の買継相場 (天保元～14年)

年	買 継 相 場
天保 元年	17俵
2年	20俵5分
3年	18俵9分
4年	13俵5分
5年	17俵2分
6年	14俵1分
7年	11俵
8年	13俵5分
9年	10俵3分5厘
10年	17俵1分
11年	19俵5分
12年	20俵
13年	20俵
14年	17俵8分

出典 表2と同じ (733～734頁)。

る。「米価記」には柴田により「此相場高直ノ第一ナリ」と註記がある<sup>(14)</sup>。その後、7～8俵で推移し、9月末に13俵5分にまで下がった。以降はそのまま低落傾向を示すことになる。第2段階においては、端境期が過ぎて当年の収穫期に入っても相場が下降しないという、飢饉の際の特徴が顕著である。

「米価記」の天保7年の欄には、柴田により「大凶年故、買次相場勘弁アリ」と註記がある<sup>(12)</sup>。天保飢饉の際の不作状況については、拙稿「天保飢饉下の遠三州十か宿」で触れたことがあるので<sup>(13)</sup>、もう一つの要素である「買次相場」について、その動向を表4に示した。これによれば、天保7年のそれは、それ以前の数年のなかでは、最も高値である。しかしこの相場でも、吉田藩の操作、すなわち、実際よりは低く抑えた相場であることは、柴田の註記から予想してよいであろう。

天保8年は、前年末の上昇傾向をうけ、正月1日に8俵2分からはじまり、4月7日、ついに金10両につき6俵3分にまで急騰した。この高値が天保飢饉の際の最高値であ

## 2 吉田の小売白米値段

### (1) 史料の性格

『幕末期米屋吉左衛門「諸事控」』(仮題、以下「諸事控」とだけ記す)は、愛知大学総合郷土研究所が所蔵する横半帳(法量14.6×19.0)の複写本(コピー)である。所蔵されるにいたった経緯については判然としない。その内容は、嘉永7年(1854)2月の次のような記録から始まる。

嘉永七年

甲寅二月中旬ヨリ写

初相場

一御切手現金	拾七俵二分五リ
一三月勝手	拾七俵壹分
一三月限り	拾七俵壹分

一在蔵米	拾七俵五分
一升数米	七斗八升
一餅米	七斗四升
一春麦	七斗三升
一大麦	三拾三俵
一小麦	九斗五升
一大豆	六斗三升
一小豆	四斗貳升
一たね	五斗三升
一胡麻	四斗五升
一水油	壹斗三升八合
一赤穂塩	拾五俵五分
一才田塩	三拾俵
一ほしか	六七俵
一諸白	七八斗
一ゼニ	六貫七百文

## 小売

一御蔵米	九拾文
一同白米	百四文
一餅白米	百拾貳文
一春麦	九拾四文
一大豆	百拾六文
一小豆	百六拾文

右之通り

寅正月

月番

かや町

初相場とは、毎年頭の最初の相場のことである。これを同年2月に、なんらかの動機で写したことを契機として、「諸事控」はできあがったのである。相場の対象品目は米・雑穀・灯油・塩・干鰯・酒と銭相場である。「小売」は別のところでは、「小売触」ともあり、1升あたりの価格である。

こうした初相場・小売触のほかに、貨幣の吹き替えに関する幕府触書や天候による農作物の豊凶、吉田藩の払米の入札状況、各種の頼母子講、吉田城下の情勢等が書き込まれている。このうち、吉田藩札の発行に関する触書については、筆者が担当した総合郷土研究

所主催の公開講演会で使用したことがある<sup>(15)</sup>。

仮題の元になる米屋吉左衛門に当たる人物は、次のような形で登場する。それは、吉田藩の厩に対する馬飼料の粉糠納入に関するもので、代金受取書の署名者の一人としてである。これによれば、米屋吉左衛門とは曲尺手町の吉左衛門のことで、嘉永7年(1854)閏7月には吉田惣町の穀屋仲間の月番をつとめていた。

## 御用粉糠覚

一惣町穀屋中へ月番を集二廻り俵二入、  
貫札附、御馬部屋小頭幸七様へ納候  
事、尤壹升拾四文集メ六拾貫納、尤  
時々之相場ニ而高下共御入用丈御用立  
可申候様被仰渡候、  
右粉糠代請取書附御下書左ニ記し置候、

## 覚

一金壹両貳朱ト三匁六分 粉糠九俵  
此七拾壹貫百目

但、両ニ六拾貫目替

右之通粉糠代奉請取候、以上、

寅閏七月

月番

曲尺手町

惣右衛門

吉左衛門

御厩

御役所様

(後略)

こうしてみると、吉左衛門の家業は、「米屋」というよりは「穀屋」であることになる。享和2年(1802)の「東海道御分間ニ付当宿方書上控帳」によれば、吉田宿には穀問屋1軒と穀屋47軒があるから<sup>(16)</sup>、このなかの1軒ということになるのであろう。

「諸事控」の安政2年(1855)の記事のなかには、「十一月廿三日米会所相場」という語句があるから、相場の決定や穀屋仲間の事務は、米会所で行われていたのであろう。



このように「諸事控」は、穀屋吉左衛門の業務用の覚書として明治初年まで書き継がれ、最終的には明治8年(1875)頃の記事が記録されている。この頃になると、業務というより、より私的な記事が目立つようになるが、極めて貴重な史料であることは間違いないところである。

なお、幸いにも吉田の穀屋仲間に関する史料が残されていることを筆者は最近知った。それは、天保12年(1841)の「穀屋仲間連印帳」、文政9年(1826)・天保8年の「穀屋相場帳」、天保15年・文久3年(1863)の「米穀相場帳」である<sup>(17)</sup>。

## (2) 白米の小売価格

「諸事控」から、小売舐、または小売相場として記録された蔵米・玄米・白米・餅米、銭相場のうち、白米値段だけを表5に示した。その動向を概観すると、次の通りである。

安政年間は、前半は100文台だったが、後半は130文後半で推移した。万延元年(1860)に入ると上昇傾向を示す。同年のデータを補うために、吉田の隣に位置する羽田村の浄慈院住職が記した『豊橋市浄慈院日別雑記』から、吉田の特徴を示す記事を挙げる<sup>(18)</sup>。

(万延元年5月)

十六日朝より雨、大々雨也、昼頃晴ル、今日も水出ル、此間より度々水出ト云、珍敷年也、十一日二大名三頭吉田へ宿りまた滞留と申事、米も一升百六十四文、大名滞留故青物類都而菜之類高直所々難儀と申事也、

すなわち、小売値段の上昇は降雨による吉田宿での参勤大名の滞留が原因である、というのである。併せて、野菜類の価格高騰も記録されていて興味深い。

さて、白米の小売値段は、翌文久元年2月末には200文を超える。6月5日に234文とピークを示した後は低落する。以降、130～

150文台で推移するが、文久3年(1863)1月7日の初相場で、白米の小売値段は1升につき160文と、この期間での一時的な高値を記録する。これについては「諸事控」に次のような記事がある。

(文久3年)

正月廿三日 四文下ケ 指笠町

一白米壺升 百五拾六文

廿七日 六文下ケ

一同壺升 百丁五拾文

(日付なし) 式文下ケ

一同壺升 百四拾八文

右者正月八日江戸より御内意之趣、御上洛御船ニ相成候由、御荷物、御供之諸家様計東海道御通行有之候ニ付、龍拈寺地中御小屋普請并ニ所々ニ御馬屋御普請ニ取掛り候処、右之御沙汰ニ付、八日昼頃より不残御見合ニ相成申候、

右之風聞より米相場日々ニ下落ニ相成申候、

すなわち、14代将軍家茂の上洛に備えて各所で普請が始まると小売値段が上昇したのであるが、将軍自身の通行が海路に変更され、東海道を通行するのは、諸荷物と同行する幕府勢の通行だけだとの情報が伝わると、普請は中止となり、小売値段は下降し始めた、というのである。

慶応年間はデータが少ないが、同元年(1865)に入ると、200文台を駆け上り、同2年は300文台後半、慶応3年初めには700～800文台に高騰する。この現象は、慶応2年の不作を基礎的条件とし、開国以降のインフレ、政治的混乱等が原因である。

表5 安政元年～慶応3年の白米小売値段（1升につき）

年.月.日	白米	年.月.日	白米	年.月.日	白米
安政1.1.20.	112文	8.19.	126文	7.19.	134文
2.5.	108文	8.24.	128文	8.11.	130文
2.晦.	106文	9.10.	130文	8.25.	126文
3.25.	104文	9.19.	136文	閏8.20.	130文
6.15.	108文	9.30.	140文	(不 明)	134文
7.4.	112文	12.23.	132文	(不 明)	138文
7.18.	118文	万延元.1.5.	136文	(不 明)	142文
7.28.	112文	1.30.	138文	9.21.	146文
2.3.22.	100文	2.20.	140文	10.4.	154文
(不 明)	100文	2.30.	142文	10.30.	150文
12.4.	88文	3.15.	144文	11.15.	146文
3.1.5.	92文	3.20.	146文	11.晦.	150文
4.3.□.	94文	3.26.	148文	12.14.	152文
4.7.	100文	5.7.	152文	(不 明)	154文
4.26.	102文	10.11.	164文	文久3.1.7.	160文
閏5.9.	110文	10.15.	168文	1.23.	156文
閏5.14.	112文	11.25.	164文	1.27.	150文
閏5.20.	114文	12.5.	168文	(不 明)	148文
閏5.22.	118文	文久元.1.8.	184文	3.26.	152文
10.6.	116文	1.15.	174文	元治元.10.13.	162文
11.10.	120文	2.15.	192文	10.15.	174文
12.14.	128文	2.25.	214文	10.20.	180文
5.1.5.	132文	3.5.	210文	慶応元.3.15.	212文
2.3.	130文	4.1.	206文	4.1.	220文
2.30.	128文	6.5.	234文	4.7.	228文
3.8.	126文	8.1.	216文	4.15.	236文
4.10.	128文	8.3.	206文	4.20.	244文
4.24.	130文	8.8.	192文	4.25.	260文
5.1.	132文	8.14.	168文	5.14.	266文
5.9.	134文	8.20.	154文	(不 明)	266文
6.24.	136文	9.1.	162文	(不 明)	280文
8.15.	144文	9.15.	168文	(不 明)	288文
9.7.	136文	10.3.	158文	7.7.	304文
9.24.	140文	10.11.	140文	7.8.	294文
11.14.	132文	(不 明)	144文	7.15.	280文
11.26.	130文	(不 明)	152文	2.1.5.	366文
6.1.5.	134文	12.23.	158文	1.16.	380文
1.24.	130文	文久2.1.10.	164文	(不 明)	380文
2.26.	132文	1.20.	158文	(不 明)	388文
3.20.	134文	2.15.	154文	(不 明)	400文
3.28.	136文	3.1.	150文	3.1.5.	736文
4.8.	138文	4.15.	146文	1.24.	724文
4.17.	140文	5.15.	150文	2.1.	820文
7.19.	138文	5.21.	154文	2.11.	852文
7.27.	136文	6.29.	150文	2.15.	884文
8.6.	132文	7.8.	146文	(不 明)	862文
8.12.	130文	7.10.	142文	2.30.	848文
8.17.	128文	7.14.	138文	4.1.	800文

出典 『幕末期米屋吉左衛門「諸事控」』（仮題）、愛知大学総合郷土研究所蔵。



## おわりに

以上、安政元年(1854)～文久2(1862)年の町相場と安政元年～慶応3年(1687)の白米小売値段を紹介し、その動向に関して補足史料を挙げた。その際の視点は、松平氏の城下町、東海道の宿場町、吉田湊をもつ湊町という、三つの吉田の特質のうち、宿場町に関するものに限った。それは、この特質が町相場や小売値段の上下に極めて強く影響すると、筆者が考えたからである。要約と課題を示して結びとしたい。

町相場・小売値段とも万延元年(1860)の天候不順にともなう不作の影響で、同年後半から翌文久元年6月にかけて数値が上昇した。町相場の上昇は、天保飢饉に匹敵するもので、万延元年の不作が単年で終わらずに数年続けば、確実に飢饉状況が再現したといっても過言ではないものであった。

同様に、白米小売価格も1升あたり200文台に上昇した。この水準は、刈谷の天保飢饉時の白米価格と同水準で<sup>(19)</sup>、この点からも万延元年の不作が、庶民生活に与えた打撃はかなりのものであった。

数値が不足しているが、慶応年間の1升あたり700文台という小売値段に対する評価については、あらためて説明する必要はないであろう。

宿場町でもある吉田の米値段が、東海道利用者の動向や政治状況に敏感に反応する例を示した。ひとつは、参勤大名の滞留であり、もうひとつは將軍家茂の上洛である。

米価や諸色直段の動向を明らかにするとともに、その原因についても追求していくことが、今後の課題であろう。

## 註

- (1) 「諸色値段表」『刈谷町庄屋留帳 索引』(平成元年3月、刈谷市) 166～243頁。
- (2) 柴田善伸「米価記」『三河文献集成』近世編(昭和40年7月、愛知県宝飯地方史編纂委員会) 721～736頁。厳密には、町相場等の数値を載せているのは「米価記」に含まれる「米価年表」であるが、ここでは「米価記」とする。
- (3) 拙稿「三河吉田藩における大豆耕作の実態と流通・消費」『愛知大学総合郷土研究所紀要』第51輯(2006年3月、愛知大学)、拙稿「『浄慈院日別雑記』にみる鋤・鎌の調達・手入れと灯し油の価格変動」渡辺和敏監修『豊橋市浄慈院日別雑記』V(平成23年3月、あるむ)所収の解説Ⅲ。
- (4) 『西村次右衛門日記』上(昭和60年3月、豊橋市) 471～473頁。
- (5) 前掲註(4)『西村次右衛門日記』上、474～475頁。
- (6) 『西村次右衛門日記』下(昭和60年3月、豊橋市) 295頁。
- (7) 「三浦深右衛門日記」『西村次右衛門日記(補遺)・三浦深右衛門日記』(平成6年3月、豊橋市) 849頁。
- (8) 前掲註(3)拙稿「三河吉田藩における大豆耕作の実態と流通・消費」52～53頁。
- (9) 前掲註(4)『西村次右衛門日記』上、427～428頁。
- (10) 前掲註(4)『西村次右衛門日記』上、630頁。
- (11) 前掲註(4)『西村次右衛門日記』上、692頁。
- (12) 前掲註(2)「米価記」734頁。
- (13) 拙稿「天保飢饉下の遠三州10か宿」『愛知大学総合郷土研究所紀要』第59輯(平成26年3月、愛知大学) 92～93頁。
- (14) 前掲註(2)「米価記」734頁。
- (15) 愛知大学総合郷土研究所主催第1回公開講演会「藩札 江戸時代の紙幣と生活」平成25年7月6日開催。
- (16) 「享和二年九月 東海道分間絵図調査につき東海道吉田宿方書上控帳写(抄)」『愛知県史』資料編近世5 東三河(平成20年3月、愛知県) 557頁。
- (17) 久住祐一郎「東海道二川宿における商家の経営と地域金融」地方史研究協議会第66回大会用発表レジュメ。史料概要については、豊橋市美術館、文献担当嘱託 鶴田知大氏のご教示による。
- (18) 「浄慈院日別雑記」『豊橋市浄慈院日別雑記』(平成20年3月、あるむ) 589頁。
- (19) 前掲註(1)「諸色値段表」218頁。